

近代西欧のユートピア思想

—二人の大法官の夢—

序

ソヴィエト連邦を初めとする東欧社会主義圏の崩壊は極めてショッキングな事件であった。これは一つの体制の終わりということにとどまらないからだ。マルクシズムという一九世紀後半から西欧の多くの知識人たち、とりわけ優秀な青年たちの心を捉えてきたユートピア思想の現実化の挫折を意味するからである。ロシア革命が人々に与えた幻想はいかばかりのものであったか。後には『動物農場』（一九四五）や『一九八四年』（一九四九）で鋭い社会主義批判を行うジョージ・オーウェル（一九〇三—一九五〇）すらこの出来事に強い感銘を受けたひとりであったほどである。しかし体制の崩壊後の混乱も大変なものであった。弱肉強食の社会と化してしまつたらである。これからどういゆう方向に持って行こうというのであろうか。恐らくは西欧・北欧型の福祉社会が目指されるのであろう

が、これらの社会も常に危機を内包している。経済成長が止まればたちまち弱者切り捨ての道を選ぶことは「ゆりかごから墓場」までを誇つた英国でサッチャー政権が採つた政策を見れば明らかである。いずれにせよ、今回、私は、近代西欧のユートピア思想の原点の紹介に話を限らせていただく。

I

原点は、いうまでもなく、トマス・モア（二四七八—一五三五）の『ユートピア』である。しかしモア自身プラトン（前四二七—三四七）の『国家』とアウグスティヌス（三五四—四三〇）の『神の国』の双方から着想を得ている。

この二つのモデルの考察から始めることにしよう。それらは共通の目標を目指しながらも極めて対照的である。

石井 忠厚

(一) プラトン

『国家』は極めて複雑な構造を持った作品で数多くの主題が取り上げられている。しかし中心的テーマは理想的ポリスとそこでの市民の幸福の確保であることは間違いない。人間孤独では生きられないから寄り集まって社会を構成する。最初は小さな社会で、人々は必要最小限度のもので満足していたから成員が役割分担を果たしながらも自ずと正義が成立し、戦争を知らないし、かえって健康と長命を享受していた。

しかし諸技術と分業化の発展は人々の欲望をも次第に増大させると同時により大きなポリス、更には恐らくテロス同盟のような連合体を生みだし、自分たちの贅沢な生活の追求のために戦争すら辞さないという事態になる。他面、個人の利益の追求のために不正が放任され社会が腐敗する。当時のアテナイがそうであつたように。そこでプラトンの理想国は出来るだけ他の国家から遠い土地に建国されながらも、やはり戦争を予想することは避けられない。ただし正義の実現を前提とするこの国は防衛のみを考えているのであるが。

ところで正義とは何か。その実現した国家は個人を幸福にするのか。プラトンは個人と社会とのアナロジーのうえにこの考察を行う。実際の議論は社会から個人へと流れるのであるが、単純化して述べる。個人は理性・気概・欲望からなる靈魂の調和が成立すると幸福を得られる。同様に国家も哲人Ⅱ知者・守護者Ⅱ戰士・生産者(農民・職人)の間に調和が成立する時に正義が実現し、それゆえ個人の幸福な生活が確保されるというのである。

とりわけ細かな描写がなされるのは戰士階級である。ポリスのうちでも肉体的にも精神的にも最も優秀な男女からなる。この人たち

は共同生活を送る。あらゆるもの、異性すら共有される。私物は必要最小限度のものに限定される。彼らの物質的基盤は生産者の奉仕によって支えられている。その代わりに人民は平和な生活を享受できるわけだ。そして多分、私有財産は彼らには認められていた。しかし貧困は避けられねばならないが、富も労働意欲をそぐから常にほどほどのものであるよう民衆には節制の徳が要求された。それは具体的には戰士階級の指導に服することを意味する。しかし節制は戰士にも要求される。

実際、彼らの描写が中心となつていゝることの一つは人民への過度の抑圧、過度の収奪を防いで国家への奉仕を実現させるにはどうすればよいかの考察である。彼らには勇氣という徳も要求されるが、それだけでは節制を実現するのに充分ではない。彼らもまた少数の知者への自発的服従が要求される。つまりは知者の補助者として一般市民を指導するわけである。とはいへ知者の選抜は彼らの中からなされる。しかし、その前に彼ら自身がどのようにして選抜されたかを見なければならぬであらう。

この社会の根幹をなすのは子供は国家のものであるという前提があるということである。これは人民にも恐らくは適用された。親子関係は一度は解消され、子供たちは国家に委ねられるわけである。従つて先ず第一の選抜は虚弱児・不具者として生まれた者は国家に無用として処分されてしまふかたちで行われる。次には遊びの中で文芸・音楽・体育を通して節制の重要性が習得されるようにされる一方、さりげないかたちではあるが、算術と幾何の初歩の知識の習得も図られるのである。いずれも実用的な知識だからである。そしてこの過程で知者たちは子供たちの自然的素質を見極め、戰士と生

産者の分別を行う。そして選ばれた若者は組織的な体育を受けて戦士に育てられる。しかし、その間にも知者は学問的素質のあるものを見抜き、こうして知者候補が決定される。そして先ず数学的諸学問の体系的習得の成果による選抜、次に弁証法に対する能力による選抜という経過を経て最終的には善の知識を獲得し得た者が指導者の資格を得る。善の知識こそ国家・個人を問わず幸福の実現には根本的土台であるからである。このような知者に従うときのみ理想的社会は実現するであろう。

プラトンの国家構想はスパルタが念頭にあつたとされる。しかしいくつかの点で根本的に異なる。先ずスパルタはリユクルゴスという賢者の定めたとされる法に従う国である。しかしこの理想的法は確かにすばらしいものではあるが、予測し得ない事態に直面したときどうするのか。プラトンも法の重要性は認識していたが、それはあくまでも補助的手段であつて、知者によるそのときどきの柔軟な対処こそ本質的であると考へていたようである。知識こそ全てである。次にスパルタ市民全体が戦士階級であつたわけであり、この下に生産者階級があるわけであるが、彼らはいくまでも農奴であつて、彼らの幸福が積極的に考慮されることはない。実際、スパルタは彼らの反乱にしばしばエネルギーを裂くことを余儀なくされたのである。最後にスパルタ人は質素な生活を旨とし、いわば禁欲的な生活を強いられていたが、プラトンはこれではかえつて節制の徳を身につける妨げになると批判する。彼は精神的快楽のみならず肉体的快楽にも肯定的であつた。飲酒や美食も否定されていない。ただ節度を要求するのみである。スパルタはその鎖國的体制によつてのみ、その国制を維持して来たのであるが、プラトンの洞察通どおり、反

アロス同盟の盟主に祭りあげられ、ペロポネソス戦争に勝利を収め、贅沢の味を覚えると同時に内部から崩壊したのである。

しかしプラトンのユートピアも文明化された現実を前提にしながらも太古の個人と社会が一体化していた過去への郷愁は隠せない。実際、知者をも含めた全階級が全体への奉仕のための機能に還元されているからである。つまりは蟻・蜂型の社会なのである。個性の尊重は見られない。全体主義と批判される所以である。だがプラトンを弁護すれば、この場合、各人が意識的、自覚的に己の分を心得た上でその役割を引き受けているという想定に立つてこの理想国家が成り立つている、ということ強調しておく必要がある。この全体主義社会には原則的に強制は存在しない。

プラトンのユートピア思想に関する論議はその後『ポリテイコス』を経て『法律』では、この理想型に近い社会をどのようにすれば現実化するかを巡つて続けられ、『クリティアス』では、伝説という形ではあるが、アトランティスの野望を打ち砕いた古アテナイに、その近似型が見られたとされる。あるいはペルシア戦争当時の健全なアテナイが心中を横切っていたのかもしれない。これらの詳細はここでは割愛する。

(2) アウグステイヌス

キリスト教徒・護教家としてのアウグステイヌスのユートピアの実現は、もちろん、歴史の終末、神の審判を経て初めてなされることになる。人類の歴史はそこに至るまでの旅である。しかし、そのことは全てを神に委ねて、われわれが消極的待望の内にあつてよいことを意味するわけではない。この旅は既にこの地上において「神

「の国」を可能な限り実現するという重大な責務を負ってなされねばならない。

アウグステイヌスは神政国家・教会国家の建設を夢見ているのであろうか。確かに、彼は「神の国」と「地上の国」を峻別する。しかし、この区別は外的なものではない。教会が即前者ではない。逆に世俗国家が即後者ではない。彼が問題にするのは何故人々の集団に社会的の原動力となつていくかということである。二種類の愛がある。隣人愛と自己愛である。後者にのみ動かされて社会の成員が私利私欲の追求に走るとき出現するのが「地上の国」である。前者をも合わせもちとりわけその方に比重がかけられるとき形成されるのが「神の国」である。あらゆる人間が隣人愛に生きることが期待できない。それゆえ現実の社会は「神の国」と「地上の国」の混合体である。教会にも後者の支配が及ぶし、世俗国家も前者の支配の対象となる。要は「神の国」の支配を拡大することである。真の隣人愛は神・キリストへの愛に支えられてのみ可能となるというのがアウグステイヌスの立場であるから、まことの神の姿を世に示す教会は、その意味では、この支配の拠点ではある。しかし本当の鍵を握っているのは、どのような生き方を選ぶかという個々人の選択・決断にかかっているとするのが、アウグステイヌスのユートピア思想である。彼は体制や組織を論じない。個人を論ずる。隣人愛のないメンバーから構成されている限り、君主制・貴族制・民主制いづれも不正で墮落した社会になるのである。「神の国」の支配が勝つていくかどうかは、正義・公正の実現の程度において測られることにならう。逆に正義の実現されている社会は、たとえキリスト教を知らなくても隣人愛が原理となつていく社会だと見る。例えば、ロー

マ共和制初期の社会。プラトンの「国家」。だがそこにおいては、未だこの原理が明瞭に自覚されているとは言えない。プラトンの正義の社会は子供の選別に見られるように弱者・劣等者には厳しい社会である。エロス・フィリアとアガペの差とでも言えようか。「神の国」では知よりも愛、これが強調される。

以上、見てきたように、アウグステイヌスにおいては、ユートピアは、孤立して存在するものではない。いかなる社会においても「神の国」実現に向けて努力されるべきことを要請するのである。要するに、彼の視野に入っている限りでの全人類が問題にされているわけである。そして目ははっきり未来に向けられていることも注目に値する。

II

さてモアのユートピアはこれら二つの源泉からの流れの合流地点にあつて構想される。プラトンからは具体的などころでは「法律」をも参照しつつ。

ユートピアはアメリカゴ・ヴェスプッチの世界一周航海に参加したラファエル・ヒスロデイが本隊と別れて、帰国の旅の途中に出会った社会の報告というかたちで、構成されている。従つて、ヨーロッパ、とりわけイギリスの現状を批判し、ユートピアを讃えるのは、この水夫である。この人物は必ずしも架空の存在ではなく、現実のモデルがあると言われている。というのも、モアのユートピアにはインカ帝国からかなり具体的な着想を得たと見られる部分があるからである。いずれにせよ、モアは、必ずしもラファエルの意見に全

面的に賛同するという立場には立っていない。ここではモア本人の意向がどうであれ、作品の中で描かれているユートピアを問題にしたい。実際に、ここで描かれたユートピアが、その後のヨーロッパのユートピアニズムに強い影響を与えたのであるから。

モアの特色をなすのは、多くの人間が直面してきた飢餓の問題に正面から立ち向かったところに、一番、認められるように思える。確かに、農業技術の低さ、自然のきまぐれによっても飢饉は生じ得よう。しかし、モアの見るところ、飢餓は社会的要因によるものなのである。無為徒食の者が多すぎ、しかも彼らが生産者から搾取して自分たちの華美贅沢を追求するために、かえって生産者が飢えるという結果になるというわけである。その上モアの時代、自分たちの利益を最優先する地主たちの囲い込みによって農地を奪われた農民たちの貧困化が目にするイギリスの現実もあった。

この社会的貧困の問題の解決と社会的正義の実現を一つに結び付けたところがモアのユートピアニズムの一番の魅力であろう。要は社会の全員が一定の時間、働けばよいのである。多少の例外は認められるが、原則は、これである。

モアのユートピアは当時の現実を反映して国民国家である。しかし実体は五二の都市国家の連合体である。中央集権は出来るだけ排除するかたちで運営されている。中央政府はなく、平時においては各都市から三名ずつ選出された長老たちの年一回の合議によって全体的なことは決定される。

モアの徹底したこの地方分権主義は、その後の多くのユートピア思想家に受け継がれ、現実においても連邦国家の存在に反映されている。

いずれにせよ、都市国家の中身が問題である。私の計算によれば、このポリスの人口は、二五万ぐらいである。五〇万という結果が得るかもしれないが、しかしイメージ的には大差がないであろう。都市の周辺は農地である。成人に達した全市民は二年交代で農業に携わる。農業の好きな市民は永住を許されるが、加えて各人は機械、石工、鍛冶、大工などの技術を少なくとも一つ身につけることを要求される。いずれにせよ、全市民は休日を除いて毎日六時間労働に就くことが要請される。しかし、この労働時間は当時としても、現代においても画期的である。モアは遊んでいる人間のいない限り、生活に必要な物質は確保されると考えている。余剰すら生ずる。それは何処かの都市が凶作に陥った万が一の場合、援助として用いられる。もちろん無償である。当然、この原則は市内でも適用される。適所に設けられた倉庫・市場から各人は自由に必要なものを持ち帰ってよいのである。この社会では住居も保証されている。一切、私有制はないし、その必要もないのである。したがって国内には商業は存在しない。国内では産出されない鉄などを求めての貿易は存在するが、確かに起床・就寝時間まで定められている窮屈な面はあるが、睡眠八時間を除いて一〇時間は各人の自由に任される。市は学問習得の時間、共同食事などの制度を設けるが、これに参加することは強制ではない。酒場も賭博場もない、この社会では娯楽も自ずと限られている。飲酒・美食などの肉体的快楽も否定されてはいないが、教育を通して精神的快楽、節制こそ最高の快楽であるということが全市民に徹底していることが前提されているのである。それゆえ、社交に大いに時間が費やされることになろう。友愛こそ最高の喜びである。

さて、肉体労働を免除された特権者の話を巡って、この社会の政治体制を問題にしなければならぬ。社会の単位は大家族である。四〇名ぐらいからならぬとされている。恐らく直系家族だけではなく傍系家族も含んだ三世代世帯であろう。一家の最長老のものが健全である限り、家長を勤める。この家長の選挙によって地区役人が二〇〇名選出され、更にこの役人によって二〇名の市会議員と市長が選ばれる。市長のみが終身制であつて他の役職は毎年の選挙によつて選ばれる。市長といへど専制への傾向を示せば罷免される。市会には会議の度ごとに二名の地区役人が交代で参加する。この政体は家父長制民主主義とでも言えようか。いずれにせよこれらの役職者たちは労働を免除される。他に、若いときから学問に秀でていとされている者が学者として研究に専念することを許される。そして議員・市長はこれら知識人の集団から選ばれるのである。恐らくは法学において、とりわけ、傑出した者が、他にも教育者・医者、多分、非常時における軍事的指導者も。しかし労働免除の特権者の数は五〇〇名ぐらいと見積もられている。しかもこの特権を放棄する者が多いとも指摘されている。

知者の法に則つた支配、これが基本的にはユートピアを支えるものである。

しかしそれだけに法の違反者への処罰は厳しい。死刑も存在するが、一般には自由を奪われた奴隷の身分に落とすという形をとる。奴隷は他に他国で死刑の宣告を受けた者を買うことで補充される。

他に奴隷のもう一つの供給源がある。他国から自発的にユートピアの奴隷となることを志願した者たちである。よほど本国での暮らしがひどかつたのであろう。この人々には国外退去の自由も認め

られる。

モアのユートピアにおける奴隷の存在は批判されてきたが、この奴隷制は世襲的ではない。あくまでも個々人の問題である。その後ユートピア思想において目立たないかたちで問題となるのが屠殺・公共清掃・糞尿の処理などのいわゆるグロテスクな仕事を誰に任せるかということである。それを人道主義的立場（当時にあつては）に立つて、うまく処理したというのが私の印象である。

実際、弱者への配慮も、この社会を特色づけている。それは病院の施設の充実ぶりによつて窺える。その上、不治の病に冒されたものには尊厳死・安楽死を選ば自由も与えられる。この点では信仰の自由を認めることと並んでモアの先見性に感心するしかない。

しかしモアのユートピアの限界は、その徹底した国家エゴイズムにある。それは戦争と植民の問題に端的に現れる。

ユートピアは国民皆兵制である。そして、その平和主義のゆえに戦争は防衛戦として想定されている。しかし、ユートピアの住人が戦闘に狩りだされるのは最後の最後である。先ず試みられるのは敵国の腐敗につけこんで買収や情報戦によつて相手の戦意をそぐことにある。次には傭兵、友邦の軍隊の動員である。国民の血を流すことは徹底的に惜しまれる。

ユートピアでは人口管理が常に問題とされる。必要物資の配分のためにである。従つて過剰人口が生じたときには、未開地への植民がなされる。しかし、そこにも先住民はいるわけである。彼らが同化すればよし、さもなければ、自然の富の利用を怠つてきたという口実のもとに、彼らにたいしては侵略戦争が正当化される。新大陸、アフリカそして最後にはアジアまでも植民地化する西欧の中華主義

は悪い意味で受け継がれるであらう。

もう一つ取り上げねばならないことは技術のことである。この社会は決して単純再生産の社会ではない。緩やかながら、住居の改善に見られるように技術の向上は目指されている。しかし、それは偶然的である。モアには学と技術との結合を計る考えはない。

モアとは違う発想のもとに貧困の解決を求めたのが同国人ペーコン（一五六一—一六二六）である。彼は社会体制よりも自然科学と技術の結合によつて社会全体の富はますます豊かになるであらうという展望を示したのである。彼の『ニュー・アトランティス』の題名はかなり挑戦的なものだと思う。プラトンの『クリティアス』の中では物質的には豊かなアトランティスがその体制のゆえに批判されている。しかしペーコンは何よりもこの豊かな社会に惹かれていた。パイが大きくなれば貧困の問題は自ずと解決されるというのが彼の考えである。そして実際に貧困が生じたときには親族を中心とする周囲の人間が救いの手を差し延べればよいとするのである。要するに隣人愛の精神で充分である。

ともあれ、モアの社会Ⅱ共産主義とペーコンの科学技術による豊かな社会の追求は入り混じりながら、その後のユートピアニズムを支配する。そしてマルクシズムは、その結合によつて壮大な夢を描いたものと見ることが出来る。機械によつて人間は一切の強制労働から免れて、友愛のうちに各自、自由な創造的な生活を送るというのであるから。この夢そのものは、いつまでも魅力的である。しかしここへ至るまでの多様性を認めなかったことに社会主義社会の挫折の原因がある。

われわれは労働を免れないものの、結構、自由を楽しんでいる。

とはいえ、国家エゴイズム、そして、そのような国家の保護のもとにぬくぬくと甘んじている個人エゴイズム、これらのことを考慮に入れば、今後のユートピアは世界的規模において構想されねばならない。人類の圧倒的多数はいまだに飢餓に苦しんでいるのだから。加えて人間中心主義も克服されねばならない。自然に対する甘えが通用しないのが現代であるから。

以上からすると、単に社会を問題にするのではなく、人間の営みの総体、文明の在り方を問うという姿勢の中で新しいユートピアニズムは生まれるものと思われる。